

「このお店で、はたらきたい!？」



「たしかに、この店の名前には
"ライオン"がついていますが…
ライオンに、スタッフとして
はたらいてもらったことは無いんです」

「どうでしょう。
お客さんが、変におもったり、
こわがったり
しないでしょか…」



「こわがるなんて、とんでもない!!
彼をよくご覧ください!!!」

!?



かれ
「彼のたてがみを見てください。

ギザギザが1, 2, 3……21。

ほら、ビールの王冠のギザギザの数といっしょだ。

まさに、このお店に
ピッタリじゃないですか？」

「えっ」



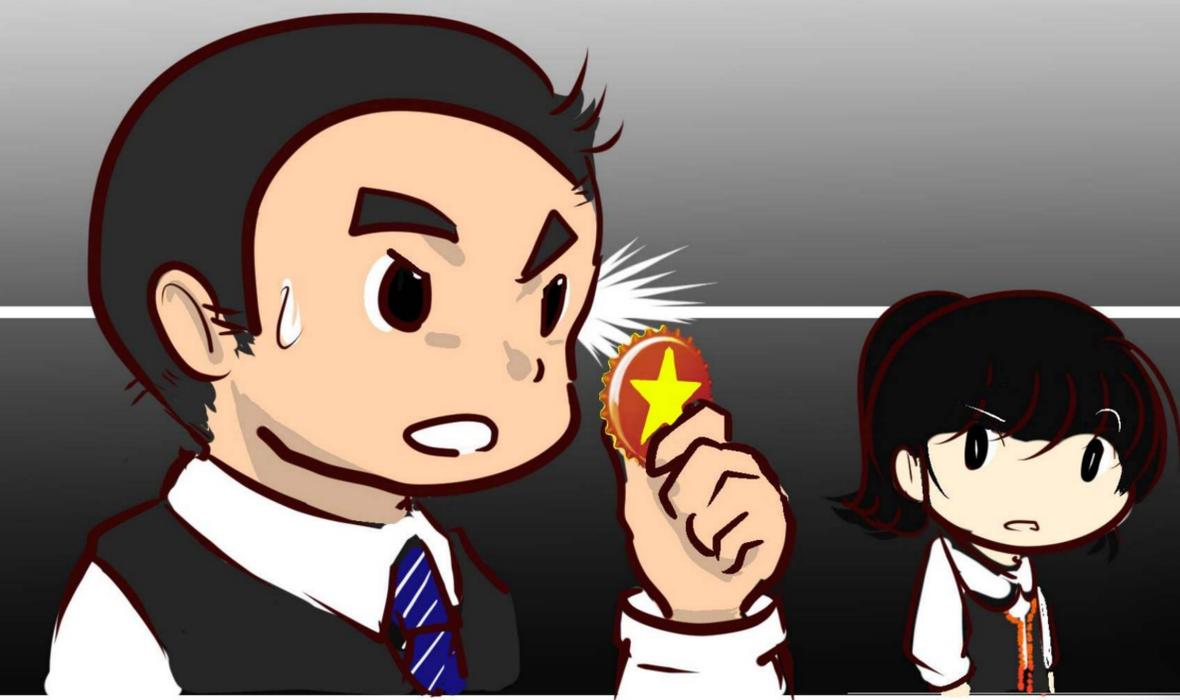
かれ
「さらに、彼のしっぽを見てください。

ギザギザが、1, 2, 3……21。

ほら、やっぱり

ビールの王冠のギザギザの数といっしょだ。

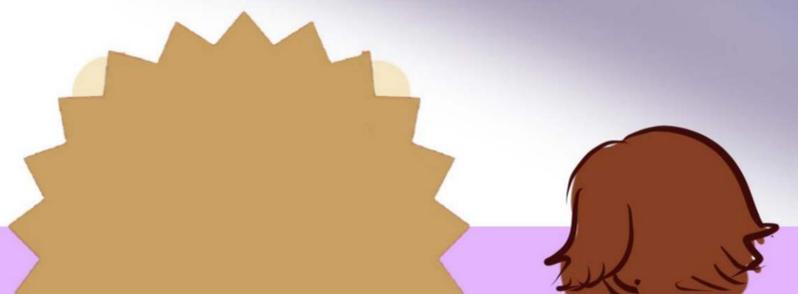
これはもう、運命をかんじませんか？」



「なるほど。
これは、見逃せない
逸材かもしれない……」

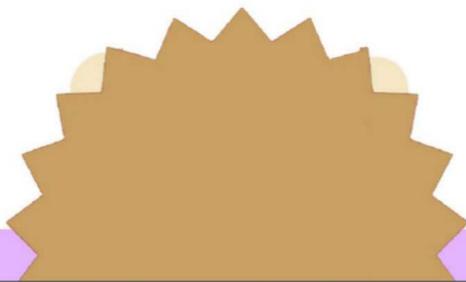
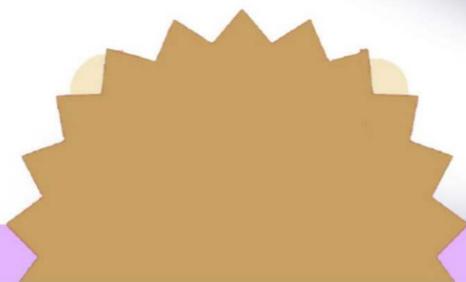


かい
「2階にいる名誉支配人に
意見をうかがってきます」





「『イイんじゃないのツ』と。」



「やったね!!!」

伊奈吉は、この^{みせ}お店で
はたらけることになりました。



伊奈吉と友だちは、
もう一度、ビールで^{いちど}乾杯^{かんぱい}しました。

